

4. 縄文時代後期後半の微隆線の土器について

キウス4遺跡出土の縄文後期後半の土器は沈線による文様装飾が主体であるが、その中に微隆線による装飾のある土器が含まれていた。堂林式土器などとは胎土が異なり、多くは赤彩されている。これらの土器は、東北地方の「瘤付土器」などに含まれている土器に類似するものである。東北各県の出土資料の一部を実見した点も踏まえて、微隆線でえがかれた土器の特徴について簡単にまとめ、キウス4遺跡における出土の意義を考察してみる。

【文様の特徴】（図Ⅲ－18）

東北地方の報告例では、「微隆線」「微隆起文」「ミミズバレ状の微隆起文」「みみず腫れ状の隆沈線」などと称している。文様を構成する線の両側を浅くくぼませたり、周囲の粘土を寄せて線を浮き上がらせたりする手法で2本1組を基本としてえかがかれており、帯状文を意識していると思われる。文様構成は弧線文・タスキ状入組文がえがかれたり大小の貼瘤が付されたりするなど、同時期の注口土器や一部深鉢形土器にみられる文様を基本としているものが多い。遺跡分布図（図Ⅲ－19）ではミミズバレ状の極めて細い微隆線の土器が出土した遺跡を黒塗り、文様を構成する線の両側を浅くくぼませた微隆線に類似する「隆沈線」などの土器が出土した遺跡を白抜きにして区別してある。

【器形の特徴】

胴部が球体に近い注口土器が基本である。環状土器（横位・縦位）、巻貝形土器、そして土偶にも微隆線が施されたものがあり、時期が新しくなるにつれて器形が多様化したことが考えられる。

【分布】（図Ⅲ－19）

主体は新潟県阿賀野川流域－福島県会津地方－阿武隈川付近以北の東北地方一帯で、北海道石狩低地帯以南での出土を確認しており、遠くは石川県にも出土地点がある（米泉遺跡）。また出土量としては、岩手県北部～青森県南部と福島県西～北部にやや多く見られる。

東北南部では出土遺跡が比較的密であるが、破片が少数出土している遺跡が多い。ただし福島県北東部と新潟県北部にはややまとまった資料がある。前者は三貫地貝塚の完形注口土器などがあり、微隆線文系の土器ではあるが、ミミズバレ状の細い微隆線と区別が微妙なものが多い。後者は山北町上山遺跡・朝日村元屋敷遺跡・新発田市中野遺跡でまとまった資料がある。上山遺跡では全面赤彩された巻貝形土器が出土している（東京国立博物館蔵）。元屋敷遺跡では、巻貝形土器のほかにも単孔壺形土器や完形の小型壺形土器など豊富に出土している。中野遺跡では、微隆線の注口土器が出土するほか、幅が狭く縄文が充填された帯状文をもつ土器があり（図Ⅲ－18の6）、微隆線成立の手がかりになるような土器が出土している。一方隣接する山形県域では、微隆線の土器が出土する遺跡はそれほど多くはみられないものの、村山市宮の前遺跡では人面付土器があり（図Ⅲ－18の15）、特色がある。

東北地方北部では出土遺跡分布がやや疎であるが、岩手県北部～青森県南部の馬淵川流域にややまとまりが見られる。特に軽米町長倉Ⅰ遺跡では、大型の「ダルマ」形の注口土器や赤彩された環状注口土器などが出土している（図Ⅲ－18の1）。また宮古市近内中村遺跡・花泉町中神遺跡では包含層から巻貝形土器が出土している。秋田県域では少数であるが、大内町鹿爪遺跡には赤彩された人面付土器があり、特色のある土器が出土している。また近年微隆線の土器が出土する遺跡が確認されている（森吉町桐内A・漆下）。

北海道では、昭和59（1984）年に長沼町12区B遺跡の異形環状土器が初めて報告され、平成8（1996）年に千歳市キウス4遺跡で出土した。近年では八雲町野田生1遺跡（北埋調報183集）・南茅部町垣ノ島A遺跡・松前町東山遺跡といった道南部で確認され始めている。また千歳市美々4遺跡の出土資料

の中にも含まれていたことが分かった(『キウス4遺跡(8)』第1 p.389)。各遺跡とも量は少ないが、異形の土器や全面赤彩など装飾が豊かなものが多い。

【出土状況の特徴】

遺構に確実に伴って出土したものは稀で、野田生1遺跡の例がある。竪穴住居跡の床面に後期中葉の甃潤式に相当する土器と伴出している。その他は、捨て場や盛土遺構など時期がある程度限定される出土例があるものの、遺物包含層出土や単独での出土例が多数見られる。

【赤彩について】

赤彩が施された微隆線の土器は、おおむね分布域全体に見られるが、特に北海道は赤彩土器の比率が高い。また新潟県域にも多くみられる。また北海道12区B・キウス4・野田生1および新潟県籠峰では赤色顔料分析により、水銀朱が塗布されたという結果が得られている。

【時期】(図Ⅲ-18)

縄文時代後期中葉～後葉、おおむね十腰内Ⅳ～Ⅴ群・瘤付土器第Ⅰ～Ⅱ段階(小林2001)の時期に伴って出土している。大きく新旧があり、以下の特徴がある。

古段階(おおむね甃潤式(新)・十腰内Ⅳ式・瘤付土器第Ⅰ段階に相当)

器種は注口土器を基本した、「ダルマ形」のものが多い。胴部の瘤はボタン状や縦割りの瘤が多く、当該期における他の注口土器の要素と共通しているものが多い。文様は弧線文の組み合わせが多く、対向弧線やたすきがけの入組文などで構成される。微隆線の断面は比較的なだらかである。

新段階(おおむね堂林式・十腰内Ⅴ式・瘤付土器第Ⅱ群に相当)

器種は巻貝形・人面付異形土器・環状土器など特殊なものが出現する。文様は弧線や直線の組み合わせなど多様化してくる。また隆帯上に細かい刻み列と尖り気味の小型の貼瘤が施されるものが多いことが特徴である。微隆線の断面は三角形になり鋭くなっており、微隆線上にも小さな瘤がつくものがあることも特徴である。

巻貝形土器は、微隆線と隆帯上に細い刻みが施されるものが古く(上山・近内中村ほか)、微隆線が少なくなり(中神)、刻みが消え(山形県上山市泥部)、ついに隆帯化する(秋田県鷹巣町藤株)という変遷が想定される。また人面付土器も同様の変遷が想定され(宮の前・鹿爪→尾形)、北海道上磯町茂辺地遺跡出土や秋田県琴丘町狐森遺跡出土の人面付土器につながるものと考えられるが、伴出土器の検討を行っておらず不明である。

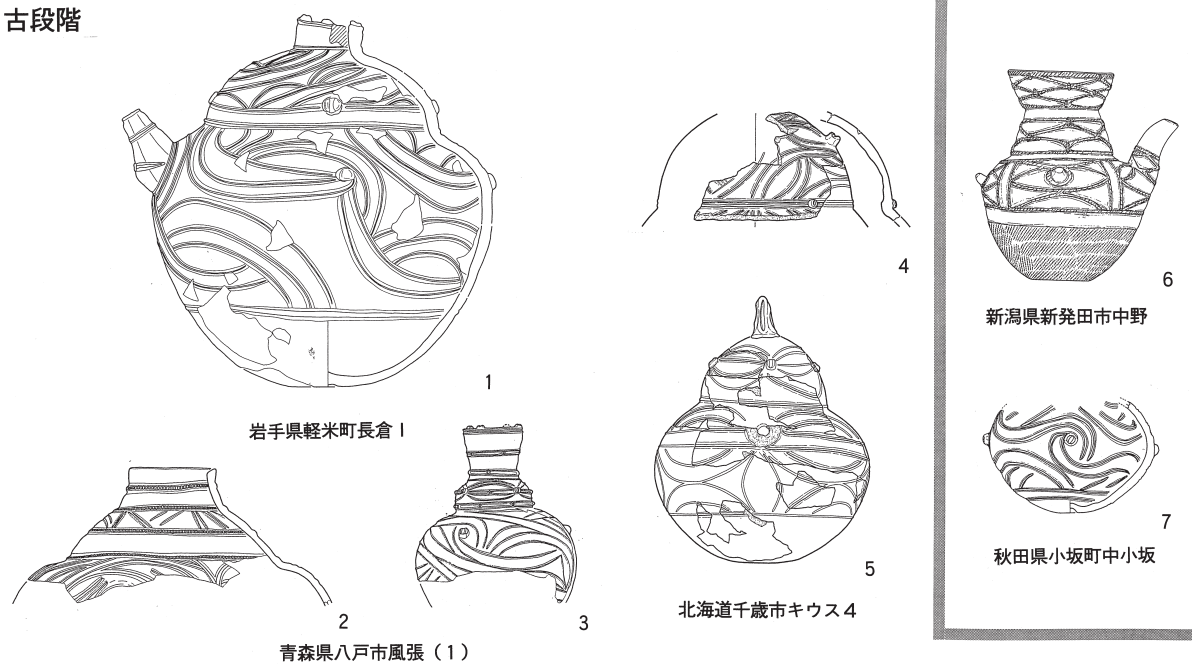
以上の点から、微隆線土器の成立とキウス4遺跡での状況を想像を加えて推測してみる。

初現的な土器があることや他の注口土器との区別が微妙な土器があることなどから、微隆線の土器は注口土器の変化の過程で東北南部の地域において成立したと考えられる。そして瘤付土器の拡散と関連して特に北方へと技術が伝播し、大型化したり装飾を加えたりしながらそれほど時間をおかずに北海道まで達したと考えられる。

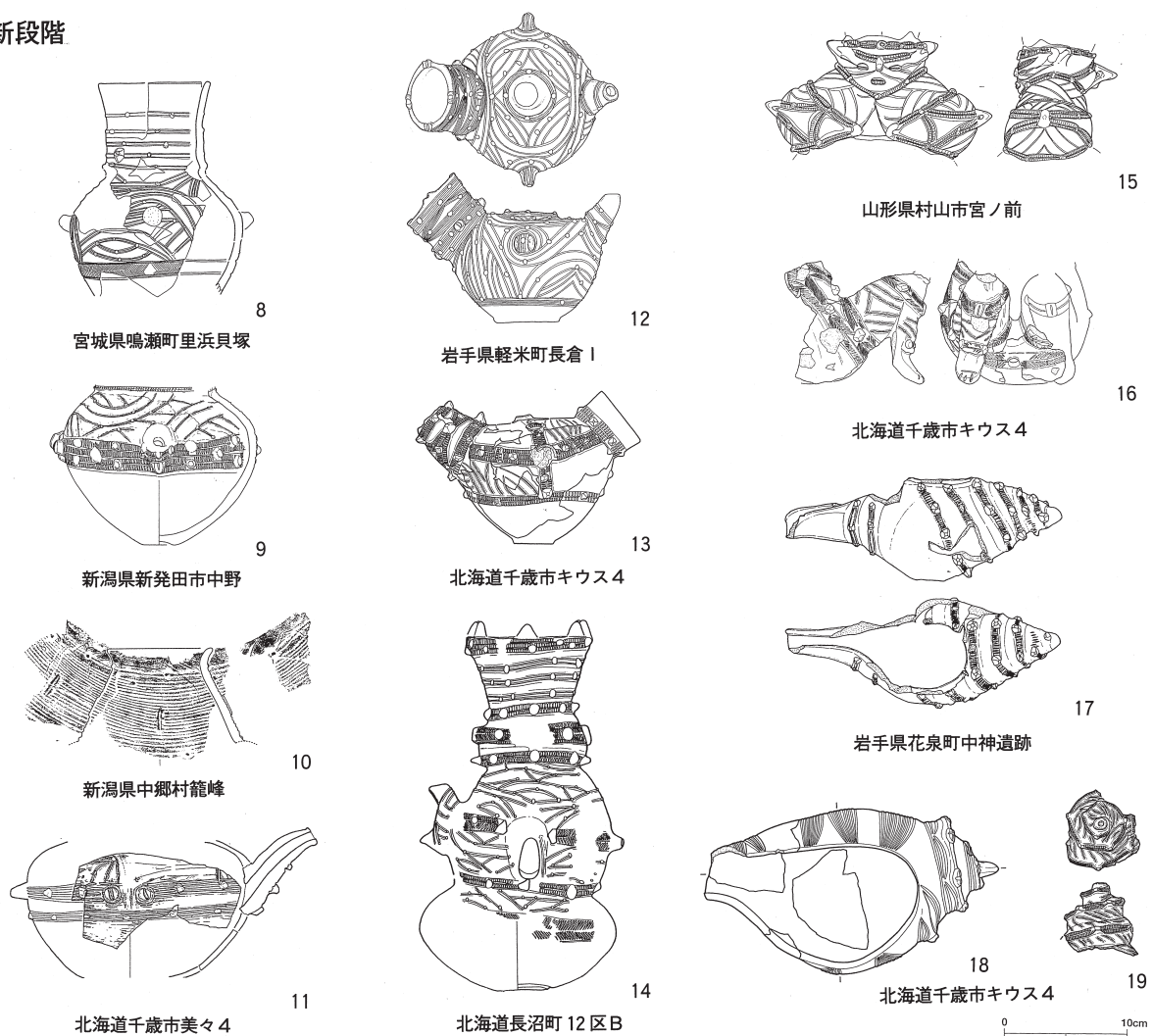
ちょうどそのころキウス4遺跡は、集落の造成が盛んになり人口が増加し始めたと考えられる時期で、交易などにより赤彩された微隆線の土器が搬入されたと考えられる。そして集落の人口が徐々に増加する中で力(生産・消費・流通)が増大し、さらに多様な搬入品が得られたと想定される。赤彩された微隆線土器は、集落の中心的な人物や他の集団に対しての威信材としての役割、また儀礼的シンボルといった役割を一時期は果たしていたことも考えられる。しかしある程度の機能を果たした後は周堤墓内の墓壇などの個人的な墓に納めることはなく、ムラ全体の力として盛土遺構に「送った」と考えられる。

(阿部)

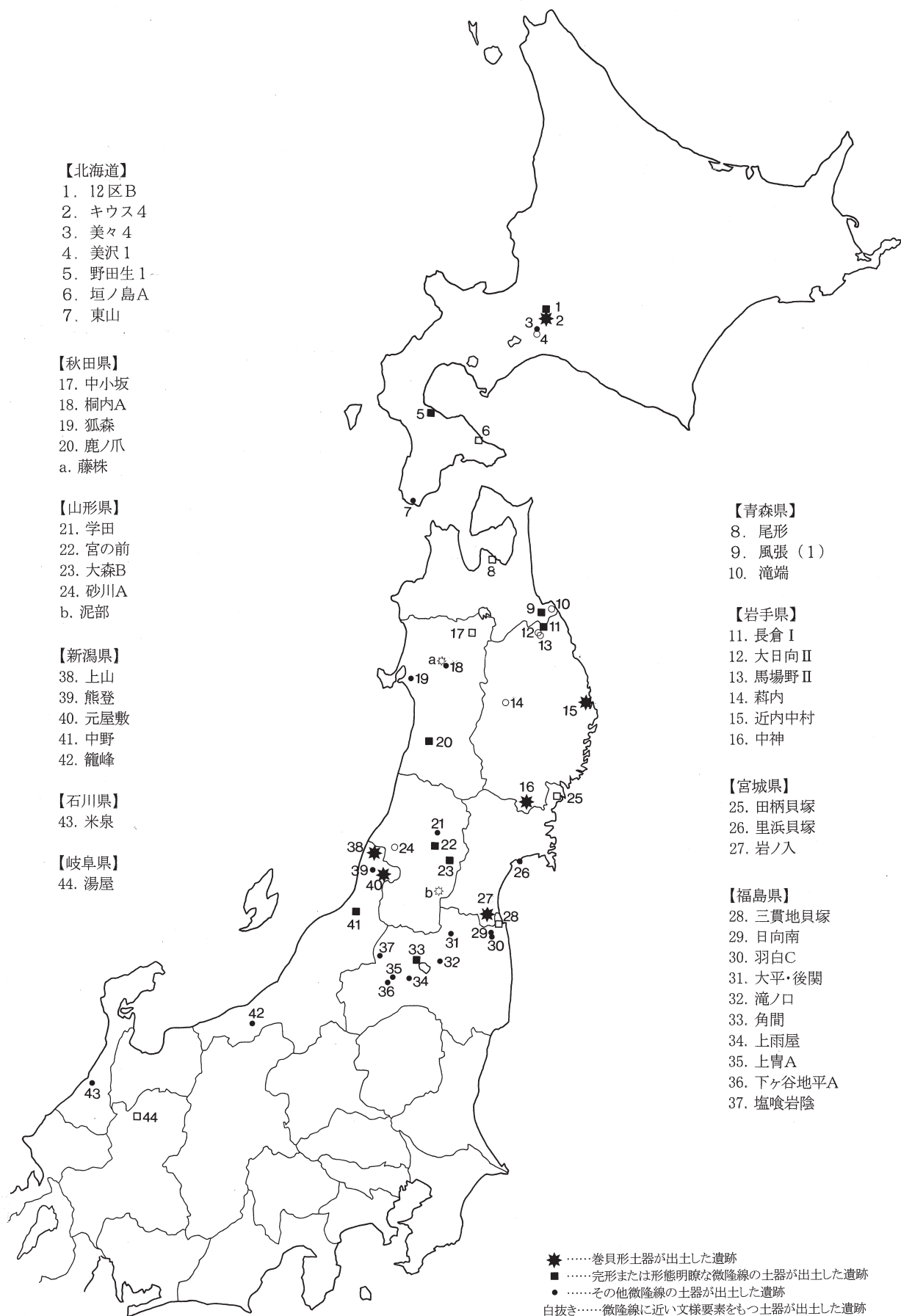
古段階



新段階



図III-18 微隆線の土器



図Ⅲ-19 微隆線の土器出土遺跡分布図